私の医療・介護物語 ⑥④

ふれんどりぃ代表取締役

筒井 すみ子 氏(4)

母の介護で学んだ生きるための介護

母の最期は病院だった。ふれんどりぃでは、利用者の自宅や小規模多機能型での看取りを支援していたのに、私の母はそうできなかった。そのことが今でも心残りだ。急に体調を崩したので、病院で診てもらいに行った。診察が終われば帰れると思っていたが、そのまま入院となり、生活をしていた小規模多機能型施設「ふれんどりぃの郷」に帰ってくることはなかった。病院へ連れていけばどういう流れになるかは分かっていたはずなのに、なぜ私は母を病院に連れて行ってしまったのだろうか。今考えると、自分一人で母の最期を判断できなかったからかもしれない。

ふれんどりぃでの看取りはいつもの生活の中で行われる。きれいな花を見たり、生活音のする空間で過ごしたり、歌を歌ったり――寝たきりにするのではなくみんなと一緒に同じように時間を過ごしている。その穏やかに過ぎていく時間の延長上に看取りがある。

死亡診断をした後には、介護職員と家族が一緒にお風呂に入れることにしている。この最後のお風呂がその人の人生の締めくくりになるのだ。利用者の家族には、延命治療を選択する人が少ない。最期まで自分の力で生き抜いてもらうふれんどりぃでのあり方がすべてだとは思わないが、家族からは感謝されている。もちろん、家族と話し合い、看取りのカンファレンスを重ねる過程で、死を受け入れ、ここでの看取りを希望する人に行っている。

母の介護で後悔していることはまだある。母は入院中に障害手帳の交付を受け障害1級になった。理由の欄に「廃用性症候群」と書いてあったのを見て、私は「私が母を動けなくした」と思った。もう少し早く、母を自分の事業所に引き取っていたらとは思ったが、その時の私にはそんなことを考える余裕はなかった。今だからこそ分かってきたことだと思う。

私は6年前に、母の死をきっかけに再会した高校の同級生と茨城で介護事業を始めた。サービス付き高齢者向け住宅に小規模多機能型を併設し24時間365日サポートできる住宅の運営だ。

母の介護から学んだ「人として最期まで生きるための介護はどうあるべきか」を形にする、私にとってはとても良い機会と受け止めた。そして、ふれんどりぃでも茨城の住宅でも、自力で立ち上がることが困難になっても介護者のサポートで「立って歩く」ことにこだわり、支援することにした。認知症介護については、認知症介護指導者の資格を取り、講師として、母の介護から見えてきたものや、介護が素晴らしい仕事だということを伝えるようにしている。

母は私が仕事を立ち上げて、会社の社長をしていることを理解していたかどうか分からないが、母が私に残したものは大きかった。亡くなってもう8年が過ぎた。私の介護への想いは、「寄り添う介護」から「自ら生きようとする人を支える介護」へと形を変えてきた。認知症になっても、寝たきりになっても、母は私の母であった。（終わり）

私（右）と生前の母。胃ろうをつけて出かけた旅行先で